

---

# R I D E R L E G E N D

スフィア

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

R I D E R   L E G E N D

### 【Nコード】

N 0 8 8 3 P

### 【作者名】

スフィア

### 【あらすじ】

突然、各ライダーの世界に滅びの現象が起き始めクウガークオーズまでのライダーは自分達の世界を守るべく立ち上がった！決して出会わずのいない12人のライダー達が出会う時、何かが起こる……！

## Ⅰ W 編・プロローグ（1）Ⅰ（前書き）

どうも、スフィアです。駄文続きになるかと思いますが応援よろしくお願いします。

## く W 編・プロローグ（1）く

二人で一人の仮面ライダー・仮面ライダー W としてエコ推進都市『風都』の平和を守ってきた左翔太郎とフィリップ。ミュージアム壊滅後、ドーパント絡みの事件はガクツと下がり、平和な日々が続いていた。

左 翔太郎「ふう。平和だなフィリップ。」

ソファーに凭れ掛かっている翔太郎は相棒のフィリップに話しかけた。

フィリップ「ああ。平和だね翔太郎。」

脚の長い丸椅子に腰掛け本を読んでいたフィリップは視線を本から離さず返答する。

左 翔太郎「こうしてると、毎日のように起きていたドーパント絡みの事件が嘘みたいだな。」

フィリップ「全くだね。だが、平和なのはいいことだろ翔太郎。」

左 翔太郎「ははっ。そうだなフィリップ。」

『コンコンッ!』

事務所のドアをノックする音が室内に響く。

フィリップ「依頼みたいだね。」

左 翔太郎「またペット探しだろ……。いつもみたいにハードボイルドに解決するだけだ。」

フィリップ「君はハードボイルドじゃなくて、ハーフボイルドでしょ?」

翔太郎は立ち上がり戸を開けに行き、フィリップは再び本の世界に戻っていった。

左 翔太郎「はい、どう言ったご相談で?」

翔太郎が戸を開けるとそこにいたのは、顔をサングラスとマスクで隠す女性だった。そう、それはフィリップの母親のシュラウドだった。

左 翔太郎「な…！シュラウドじゃないか！？」

フィリップ「！！…母さん…。一体どうして！？」

シュラウド「左翔太郎…。来人…。お前達に伝えなければならない事がある…。この風都は…いや、この世界はもうじき消滅する…。」

左 翔太郎「！！…一体どういう事なんだ…！？」

シュラウド「私にも分からない…。だが、滅びの現象が少しずつ起き始めている。」

フィリップ「母さん…。一体どうすれば、滅びの現象を止められるんだ？」

シュラウド「分からない…。だが、滅びの現象を起こしている原因を突き止めれば何とかなるかも知れない…。」

左 翔太郎「はあ…。また、事件に巻き込まれちゃったな。…だが、必ず俺達が必ず止めてみせる。そうだろ、フィリップ？」

翔太郎は壁に掛けてあつた黒いハットを被り左手をフィリップに伸ばした。

フィリップ「…ふつ。翔太郎、君らしい良い答えだね。…ああ、僕達で止めよう！」

フィリップも翔太郎と同じように右手を伸ばし翔太郎の左手を力強く握った。

シュラウド「左翔太郎、来入。この世界を…頼んだ…。」

そう言うとシュラウドは消えてしまった。その瞬間、事務所内に5体のマスカレイドドーパントが勢い良く侵入してきた。

左 翔太郎「早速お出ましか…。いくぜ、フィリップ！」

翔太郎は腹部にダブルドライバーを装着した。すると、フィリップの腹部にもダブルドライバーが装着された。

フィリップ「ああ。行くよ翔太郎！」

フィリップはサイクロンメモリを取り出した。

『CYCLONE』

左 翔太郎「へへっ。なんか懐かしいな。」

翔太郎はジャケットの内ポケットからジョーカーメモリーを取り出した。

『JOKER』

翔太郎・フィリップ「変身!!」

フィリップはサイクロンメモリーをダブルドライバーの右側に翔太郎は左側に差し込んだ。すると差し込んだサイクロンメモリーが翔太郎のダブルドライバーの右側に移動し同時にフィリップは意識を失いその場に倒れ込んだ。

『CYCLONE! JOKER!』

ドライバーから流れるメロディーと共に翔太郎の体は風に包まれ、仮面ライダーW・サイクロンジョーカーに変身した。



W「<sup>ダブル</sup>さあ、お前の罪を数えろ！！」

## Ⅱ W編(2)・キバ編プロローグ(前書き)

まだ当分、各ライダーのプロローグが続きます。何か要望や意見、感想ありましたらお願いします。

## 〜W編(2)・キバ編プロローグ〜

突如、現れたマスカレイドローパントに対抗する為、仮面ライダーWに変身した翔太郎とフィリップ。一体何が起ころうとしているのか…。

W(翔太郎)「さて、久々のWだなフィリップ。」

W<sup>フィリップ</sup>「早いところ片付けて早速、調査をしよう。」

W(翔太郎)「了解！」

マスカレイドローパント達は一斉に迫ってきた。Wはドライバーのジョーカーメモリを抜きマキシマムスロットに差し込んだ。

『J O K E R   M a x i m u m   D r i v e 』

ダブル  
W「ジョーカーエクストリーム!!」

Wは右足を軸に回し蹴りをマスカレイドドーパント達に喰らわした。Wの左足に貯められていたサイクロンのエネルギーがマスカレイドドーパント達を砕いていた。

W（翔太郎）「とりあえず、片付いたみたいだな…。」

Wはメモリを抜き変身を解除し翔太郎とフィリップは元の姿に戻った。

フィリップ「早速、調査をしていこう。…だが、敵の正体や目的が分からないから地球の本棚は使えない…。」

左 翔太郎「そうか…。…なら、探偵らしく足を使って調べていくしかないか…。」

フィリップ「照井竜にも連絡をしておこう。」

フィリップはスタッグフォンを取り出し照井に連絡を始めた。

左 翔太郎「ああ、頼んだぜフィリップ。俺はとりあえず動いてみる。」

フィリップ「何か分かったらすぐに連絡してくれよ翔太郎。」

こうして、左翔太郎とフィリップ…仮面ライダーWは動き始めた。果たして、何が起きるのだろうか…。

変わってWの世界とは、違う世界…。この世界でも、異常な現象が起きていた。

マル・ダ・ムールと呼ばれるカフェにて…。

名護 啓介「渡くん。最近、地震が多いと思わないか？」

名護はキバとして人類を共に守ってきた戦友であり友人である紅渡に問い掛けた。

紅 渡「地震…ですか？確かに多いと思いますが、それが何か？」

名護啓介「俺が思うにこれは、何かの予兆だと思う！」

紅 渡「予兆！？」

名護啓介「ああ、何か良くない事が起きようとしている。…俺には分かる！」

紅 渡「はあ…。」

渡は訳が分からず、曖昧な返答を返した。その時、店内を激しい揺れが襲った。店内には、二人以外に客はおらずマスターも外出していた為、二人はテーブルの下に隠れ必死に揺れ動くテーブルの脚を固定した。

数分後に、地震は収まり二人はテーブルの下から出てきた。

紅 渡「大丈夫ですか…名護さん…？」

名護啓介「ああ、平気だ。だが、これでいよいよ怪しくなってきたな。」

紅 渡「確かに、自然の物とは言えなくなってきましたね。…あれ？」

渡は衣服に付いた埃を払っていると、ある事に気がついた。散乱したテーブルの向こう…カウンター席に座り何かを食べている人に…。

男「おお！美味しい！やはり俺のオムライスは格別に美味しい！」

名護啓介「…ん？そこのお前…何者だ！？」

名護も気がついたらしく怒声に似た声で男に話しかけた。男は立ち上がり二人に顔を見せた。その瞬間、渡の顔は驚きの表情に変わった。

紅 渡「そ…そんな…。どうして…父さんがここに…？」

紅 音也「そうだ渡。俺はお前の父親であり、人類の宝である天才紅音也だ！」

音也の自画自賛の言葉は店内に響き渡った。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0883p/>

---

R I D E R L E G E N D

2010年12月10日17時42分発行